

# 日本語学会第 151 回大会発表要旨

The 151<sup>st</sup> Meeting of the Linguistic Society of Japan  
Abstracts of Oral presentations, Poster presentations, and Workshops

期 日：2014 年 11 月 28 日（土）・29 日（日）

会 場：名古屋大学東山キャンパス

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

**Dates:** November 28-29, Sat.-Sun., 2015

**Venue:** Nagoya University, Higashiyama Campus

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, Aichi Pref. 464-8601, Japan

## 第 1 日（11 月 28 日）

13:00－17:40 口頭発表（全学教育棟 1 階，2 階，3 階）

## 第 2 日（11 月 29 日）

10:00－12:00 ワークショップ（全学教育棟 1 階，2 階）

11:30－12:50 ポスター発表（全学教育棟 1 階学生ホール）

13:20－16:20 公開シンポジウム（経済学部（法・経本館共用館）2 階  
カンファレンスホール）

## Day1

13:00 - 17:40 Oral presentations

(The 1st, 2nd and 3rd floors of Liberal Arts & Sciences Main Building)

## Day2

10:00 - 12:00 Workshops

(The 1st and 2nd floors of Liberal Arts & Sciences Main Building)

11:30 - 12:50 Poster presentations

(Student Hall of Liberal Arts & Sciences Main Building)

13:20 - 16:20 Symposium

(Conference Hall of Law & Economics Shared Facilities Bldg.)

■口頭発表（11月28日（土） 13:00—17:40）

[A-1]

ソ系列指示詞と不定語との関連

—中古・中世を中心に—

藤本 真理子

中古日本語のソ系列指示詞には、現代語であればドーやイヅーといった不定語が用いられる箇所に、「そこそこになむ、とまりたまひぬる（どこそこに車をおとめになった）」（蜻蛉日記）のように、指示対象を伏せながら示す例がある。コやアのような具体的な指示はせず、何らかの指すべき対象があるようにふるまうソ系列は、対象はあるものの指すことができない不定語の指示と裏表の関係にあるとして、これまでも指摘されてきた。

本発表では、中古・中世のソ系列指示詞と不定語を中心に比較し、ソ系列の一部の指示が不定語へと交替した要因を分析する。中古から中世にかけて、ソ系列指示詞と不定語とが結びつく背景には、一次的な発話を二次的に再現する引用という場も関連している。「間接引用」的に書き表すために、指示対象の固定性・直示性を取り除いたソが用いられていたが、時代が下るにつれ、より空欄度の高い不定語が選択されるようになったと考えられる。

[A-2]

知覚の「する」の曖昧な他動性について

大西 美穂

「この花はいい匂いがする」のような知覚表現は、知覚活動の対象としての「匂い」と、花の属性としての「匂い」の不可分な性質を両義的に表す。本発表は、この意味的特徴を、この文の構造から説明することを目的とする。事例の分析からは、「[知覚]がする」を組み込んだ構造は、無題文と有題文に分かれること、これによって知覚を出来事としても、属性としても表現できることが示される。また、「する」は行為を表す他動詞の形態を持つが、知覚現象の対象を表す名詞のみを取り、これがガ格で標示されるという点では自動詞文である。意味は自動詞文としては特殊で、「する」はガ格名詞の行為や変化を表すわけではない。そこで、他動詞文から自動詞文への連続性（ヤコブセン 1989, Kemmer 2002）という見方からこの自他の複合的な構造を捉え、その上で、「する」が知覚活動を表し、明示されない知覚主体がメトニミー的に解釈されることを示す。

[A-3]

Japanese perspective expressions in narrative: The case of quotative TO + the verbs of coming  
/going constructions

Kiyono FUJINAGA

The purpose of the study is to compare the use of the quotative TO + the verbs of coming constructions e.g. “*konnichiwa to haittekita*. ‘s/he came in, saying hello.’” and the quotative TO + the verbs of going constructions e.g. “*sayonara to deteita*. ‘s/he went out, saying good-bye’” in narrative. Analysing ten Japanese picture books and eighteen recorded narrations of a silent film, the study suggests that although both constructions were used symmetrically in creating a storyline, the quotative TO constructions can be used both for citing a character’s speech and for summarising a character’s inner feelings, but when in conjunction with the verbs of coming, the use is restricted to the actual verbal events only.

[A-4]

「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴  
—比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から—

後藤 秀貴

本発表では、「腹」や「胸」を参照した日本語の精神表現を動機付けの観点から検討する。田中 (2003) は、「腹」と「胸」を比較する中で、「腹」が自己保存や安定性に関わる精神と結びつくことを指摘し、「腹」の特徴は「胸」よりも身体性の概念が顕著であることに由来すると論じている。しかし、人類一般に当てはまる身体基盤からの説明は、「腹」の際立ちが日本語固有であるという Matsuki (1995) の指摘と矛盾する。本発表では、米田・楠見 (2007) に基づき、「腹」と「胸」の表現を「感覚・運動レベル」(「胸が高鳴る」)、「スキーマレベル」(「{腹/胸}の内」)、「概念レベル」(「怒りが{腹から/胸に}こみ上げる」)の表象レベルへと分類する。その上で、身体基盤は「腹」よりも「胸」で顕著であり、「腹」表現の多くは(「腹を据える」)、「腰肚文化」(齋藤, 2000)等の文化基盤に強く影響を受けていることを主張する。

[A-5]

韓国語釜山方言の混成語形成におけるアクセント

姜 英淑

本発表は、韓国釜山（プサン）方言の混成語形成におけるアクセント特徴を明らかにすることを目的とする。混成語の構造は、元の2語をXとY、それぞれの任意の音節連続をA~Dとして、 $X(AB)+Y(CD)=AC, AD, BC, BD$ の4つに分類できる。このうち、AD構造の混成語が最も生産的である。基本的に音節境界で分割・結合し、「Xの第1音節+Yの第2音節以降」の結合例が最も多く、「CV構造のXの第1音節とYの第1音節の coda 以降が結合するものも幾つか存在する。混成語の長さは、Yの長さを継承するものが50%以上であり、アクセントはこの長さとは深く関わっている。

混成語形成におけるアクセント特徴は3つにまとめられる。①Yのアクセントを引き継ぐものが最も多く、Yの長さを継承する殆どのはこれに属す。②Xのアクセントを継承するものは、Xの長さを継承するものが殆どである。③XとYのアクセントとは関係なく、語頭や語末の音節構造によりアクセントが決まるものがあり、Xの一部とYの一部を足した長さになるものの殆どがこれに属す。

[A-6]

The Accent of Personal Names in South Kyengsang Korean

Michael KENSTOWICZ

The canonical Korean name consists of a Sino-Korean (SK) monosyllable plus bisyllabic given name: Kim, Yuna. In Middle Korean surnames fell into three accent classes: L-H (53%), Rise (29%), and H-H (18%). In contemporary South Kyungsang surnames in the Rise class have disappeared and the L-H > H-L class now predominates (88%). The paper explains this analogical change with the hypothesis that the Rise was decomposed into L-H, a change that neutralized the contrast with original L-H outside of the isolation context. Unlike Japanese, the Korean surname is seldom used without the given name. Thus, the original MK L-H vs. Rise contrast was difficult to recover. Restructuring the Rise class to the larger L-H class would be a natural outcome.

[B-1]

A prosodic approach to sentence-medial attachment of discourse particles in Korean and Japanese

Yoshihito DOBASHI and Changguk YIM

This study examines the distribution of the sentence-medial discourse particles *-yo* in Korean and *-ne* in Japanese. These particles can optionally and ubiquitously attach to sentence-medial materials, and they are similar in the following respects: (i) they are usually used in casual speech, (ii) they are followed by a pause, (iii) the attachment is not specific either to grammatical categories or to grammatical functions. A closer look at the distribution of these apparently similar particles, however, reveals systematic differences between the languages. We argue that the differences can be accounted for in terms of prosodic domains to which they attach: *-yo* targets the right edge of a phonological phrase while *-ne* targets that of a prosodic word.

[B-2]

Fragment answers in Formosan languages:

Form identity and derivations

Ting-Chi WEI

This paper argues that fragment answers (FAs) of Formosan languages exhibit at least three derivational patterns. Three Formosan languages, Amis, Rukai, and Puyuma, have been chosen and surveyed in terms of connectivity effects between an FA and its correlative *wh*-question. If connectivity occurs, the FA is argued to be derived from a fully-fledged structure, involving fragment raising and TP-deletion (Merchant 2004). If connectivity vanishes, the FA is argued to be a base-generated structure (Saito 2004 and Nishigauchi & Fujii 2006). The consequences show that Amis FA belongs to the movement and deletion type, Rukai FA the base-generation type, and Puyuma FA the hybrid type, revealing that different FAs may manifest different derivations, depending on whether a fragment moves or not.

[B-3]

フィジー語の3つの動詞構造

岡本 進

フィジー語の動詞文は、他動詞接尾辞と目的語に前置する冠詞の有無によって下表のように3つ（細かくは4つ）に分類できる。Aは他動詞接尾辞と目的語の意味役割が対応するが、BとCはその接辞が欠如しているため目的語の意味役割はわからない。B・Cの目的語の意味役割については従来の先行研究でも詳しい記述がない。

表: 動詞文の分類

	A		B	C
	A1	A2		
冠詞	+	+	+	-
他動詞接尾辞	+ (-Ci)	+ (-Caki)	-	
目的語の意味役割	終着点	随伴者・道具	?	

本発表は、A1とA2どちらの構造も持ちうる移動動詞と放出動詞を対象に、BとCの目的語の意味役割がA1とA2の目的語のそれにどう対応するかという問題を扱う。

インフォーマント調査の結果、Bにおける目的語は放出動詞ではA2のみに対応し（移動動詞ではBは観察されない）、Cの目的語はA1・A2どちらにも対応することが明らかとなった。つまり、他動詞接尾辞は、目的語の有無を反映していないと結論付ける。

[B-4]

イロカノ語のイデオフォン

山本 恭裕

イデオフォン（擬音語・擬態語）は形式的・記号論的に有標な語根を指し、その機能特性は絵画などと同じく「描写的」とであるとされる（Dingemense 2011）。本研究はこの機能を持つイロカノ語（オーストロネシア・フィリピン）の語根を記述・分析する。本発表の主な発見を以下に示す。

第1に、イロカノ語の一般語根の多くが2音節から成るのに対し、イデオフォンには4音節や5音節のものが多く見られる。一般語根500個とイデオフォン190個の音節数の差は統計的に有意であった ( $t(245)=6.8489, p < .001$ )。第2に、イデオフォン全体の44%で重複形式が見られ、イデオフォンの鑄型が確認された。第3に、この言語ではイデオフォンが動詞や名詞として実現する。これらの結果から、イロカノ語イデオフォンは音韻論的・形態論的に一般語根と異なる特徴を有するが、形態統語論的に言語の文法に深く統合されていると結論づける。

[B-5]

フィンランド語の A 不定詞基本形による名詞修飾の統語的制限

久保田 樹

フィンランド語の A 不定詞基本形には様々な用法があり、そのうちの 1 つが名詞修飾用法である。記述文法書などの先行研究では、主名詞には動詞由来名詞や抽象的な名詞が多いこと、主名詞句は所有文内に現れやすいことが言われている。しかし、主名詞と A 不定詞の意味的／文法的関係に関しては言及が乏しく、他の用法と曖昧な例もある。tuoli istua 「座るための椅子」であれば主名詞は A 不定詞の場所格補部に相当し、raha ostaa ruokaa 「食事を買うためのお金」であれば主名詞は A 不定詞が表す行為のための手段・道具である。これらの目的を表す例とは別に、halu istua 「座りたい欲求」のような、A 不定詞が主名詞の内容を表す場合もある。また、「主名詞+A 不定詞」は、一般の名詞句と違い、現れうる位置に制約がある。発表では、主名詞と A 不定詞の意味的／文法的関係と、名詞句の統語的制約との相関関係について明らかにし、A 不定詞による名詞修飾に関する記述を整理・精密化する。

[B-6]

ベトナム語の名詞修飾節における関係詞の生起について

グエン ティ ホン ハイ

ベトナム語は SVO の構造を持っている孤立語である。名詞修飾文では、修飾節が主名詞の後に来る。主名詞と修飾節の関係を示す関係詞 mà は文によって出現したりしなかったりする。春日 (2008) はこの関係詞の生起について、mà が現れない場合は、主名詞が修飾節内の動詞に対して主語の場合に集中して多いという結果に至っている。しかし、主名詞が修飾節の動詞の主語であっても、mà が現れる例も多く存在する。このような例を説明するには、主名詞の修飾節への文法役割に注目するだけでなく、修飾節と主節との関係、修飾節内の成分、関係詞 mà の語彙的な意味などを考慮する必要がある。考察の結果、関係詞 mà は修飾節と主節の境界がはっきりしない時や修飾節に文修飾副詞の成分がある時にはよく現れるということが分かった。この観察結果は、mà の語彙的な意味と関係するものだと考えられる。

[B-7]

オリヤ語における小さい複文  
— 2種類の再構成 (restructuring) —

山部 順治

再構成とは、「文が、2個の動詞を含むが、構造的なある観点で1個の節と同等である」こと。本発表は、オリヤ語での事例を扱う。「～しに行く」「～しかたを学ぶ」など、義務的制御構文のあるものが該当。次の点を論ずる：文法レベルの異なる2種類の再構成 — (ア) 統語形態的な再構成 | (イ) 意味的な再構成 — がある；2者の分布は（重なるが）ずれている。

再構成 (ア) | (イ) は、それぞれ、「統語形態的 | 意味的に規定される条件の下で、統語形態 | 意味が関係する特異事象が起こる」という事実として現れる。以下のような。(ア) 補文が S (統語上、主語を持つ節) でなく VP (主語を欠く節) の場合には、①同一格の共起制限、②再帰代名詞や数量詞の格一致、③使役接辞の重複に関して特異性がみられる。(イ) 文の2動詞が一括して意味解釈される場合には、人称制限（これは単一述語の2項の間に適用される）が別々の動詞に属す項どうしの間に適用される。

[C-1]

「的」の新用法：属性叙述の範囲指定としての対照焦点

長野 明子，島田 雅晴

日本語の「的」は、漢語・外来語名詞から性状形容詞をつくる派生接辞である。だが、1990年代以降、「色的に派手な車が通った」「小林さんのには何がいいんですか」「本学の教務課的にこれが OK だということ」のように、基体の語種制限がなく、句にも付加できる「的」の新用法が観察されている（金澤 2008）。

言葉の乱れやぼかし言葉とされてきたこの変化について、むしろ、形と意味の一対一対応を目指した変化であるという見方を提示する。新しい「的」は派生接辞ではなく、(1) 属性叙述文（益岡 1987）で、(2) 対照焦点の有無に関して曖昧性を示すガ主格句、ハ主題句、デ場所句の助詞の代替となり、(3) 対照焦点がある解釈の方のみを表す。この「的に（は）」を使えば、ガ・ハ・デ形を対照焦点のない解釈の標示に専念させられるようになるのである。なお、属性叙述文での対照焦点は、叙述が成立する範囲を指定する働きをすることができると考えられる。

[C-2]

焦点型「是...的」とムード型「是...的」再考  
——統語的文構造の違いから——

王 雪竹

中国語の「是...的」構文は、焦点を指定したり事態を限定したりする焦点型と、話し手の心情を表すムード型に分けられる。本発表では述語成分が動詞の場合の両者の違いを統語的に考察する。考察の結果、両者は以下の三点で互いに異なることがわかった。①焦点型「是...的」はアスペクト標識のない述語成分を内包するのに対し、ムード型はアスペクト標識の備えた完結性のある述語成分を内包する。②焦点型の否定文は「不是...的」になるのに対し、ムード型の否定文は「没」「不」の形になる。③「是...的」に付加疑問文「不是吗」をつけた場合、焦点型は情報内容の真偽性を問うことを表す。一方、ムード型は話し手が行った行為の確認もしくはその行為の妥当性を問うことを表す。さらに、本発表では、「是...的+人/モノ」という構文で「人/モノ」が文主語と同一内容を指す場合の同定文は、「是...的」文として見すべきではないということも論じた。

[C-3]

条件と主題の語用論的連続性について  
—日韓対照研究—

金 智賢

本発表では、仮定条件と主題が連続線上にあるという普遍的な議論を踏まえ、前提的な仮定条件表現（「なら」, 「damyeon」）と主題表現（「は」, 「neun」）の語用論的連続性が日本語と韓国語で異なることを明らかにし、その理由について考察する。前件の命題が話し手以外のソースによるものとして仮定する「前提的な仮定条件」は、主題と共通性があり実際語用論的連続性が見られる。ところが、この語用論的な連続性は日韓で異なる様相を見せる。これは、日本語の「なら」と韓国語の「damyeon」との「前提性」の違いによるものと考えられ、韓国語の一部の条件表現では前提性の強い「damyeon」の代わりに「neun」が用いられることによる違いと考えられる。日本語では、前提的な仮定条件形式が、中間的な使用を経てある種の主題として定着しているのに対し、韓国語の条件形式は主題への派生が進んでおらず、基本的な主題が多くに関連表現をカバーしているのである。

[C-4]

韓国語慶尚道方言における属格主語構造

金 英周, 五十嵐 陽介, 宇都木 昭, 酒井 弘

韓国語／朝鮮語に属格主語構造が存在するか否かについては、研究者の間で意見が分かれてきた (Yoon, 1991; Shon, 2004)。中国朝鮮族自治区の延辺方言には属格主語構造が存在するとの指摘 (金銀姫, 2014) を考慮すると、方言間で属格主語構造の有無が異なる可能性がある。そこで本発表では、慶尚道方言における属格主語構造の存在の有無について実験的に検討した。従属節の意味上の主語が属格で標示される構造 (お母さんの住んでいた故郷) において、属格名詞句が主語であるかどうかを判定するために、方言母語話者の産出音声の韻律パターンを分析した。分析の結果、韻律パターンは左枝分かれ構造を有する主格主語構造 (お母さんが住んでいた故郷) と一致し、右枝分かれ構造を有する名詞句修飾構造 (お母さんのなつかしい故郷) とは異なることがわかった。この結果は、慶尚道方言には属格主語構造が存在することを示唆している。

[C-5]

形式名詞補部に生じる属格主語に関する統語論的考察

小菅 智也, 小川 芳樹

日本語では主節主語の属格標示は許されないが、名詞節内では主語の属格標示が可能となる。名詞節内の属格主語認可のシステムは、先行研究においてさまざまに論じられてきた。

本発表では、従来扱われてこなかった、「はず」のような形式名詞補部に生じる属格主語を扱う。ここでは、形式名詞補部に生じる属格主語は、(i) 述語が非対格自動詞の場合にのみ認可される、(ii) 否定極性文でのみ認可されるという点で、先行研究で扱われてきた属格主語と性質が異なっていることを観察し、当該形式における属格主語が従来のタイプの属格主語とは別のシステムで認可されていることを主張する。具体的には、形式名詞が  $n$  (名詞化機能範疇) として具現し、VP を補部に選択することで、動詞の内項が属格標示される構造を提案する。

本発表ではさらに、 $n$  の「はず」は元来普通名詞として用いられていたものが、文法化した結果生じたと主張し、日本語歴史コーパスを用いて検証を行う。

[C-6]

徳島方言の文末詞「だ」の位置と機能について

富山 晴仁

徳島方言には「食べえダ」「行くよダ」などの文で見られるように、ダが文末に現れる表現が存在する。この文末詞ダは、「意味を強める」「断定性」や「言葉を柔らげる」など互いに矛盾するものさえ含んだ意味を表出する（村中 2009）。また、文末詞ダを用いた文では「疑問文が反語の解釈のみ可能」「禁止表現が事後禁止としてのみ使用可能」「独白での使用が困難」等の特徴も示す。本発表では、島田（1999）、村中（2009）の研究成果及び独自に行った調査結果を、モダリティ研究に基づきながら、助動詞ダや終助詞のヨ、ネと比較しつつ分析していく。これらを踏まえた上で、文末詞ダは焦点化の機能を持つ助動詞ダが、終助詞ヨ、ネが現れる対人的モダリティの領域に移動したものであると分析し、文末詞ダが有する上記の機能を説明する。文構造は、生成文法・日本語カートグラフィー研究で仮定されている文端構造を採用する。

[C-7]

助動詞「まい」の統語的性質と否定推量のパターン

秋庭 大悟

当発表では生成文法のミニマリストプログラムの枠組を用いて、日本語の否定法表現である「まい」の統語的な性質について以下の3点を提案する。①「まい」はC主要部もしくはv主要部に基底生成され、そこで解釈を受ける。C主要部では認識的（Epistemic）解釈を受け推量の意味を表し、v主要部では根源的（Root）解釈を受け意志を表す。②「まい」の持つ否定の意味は音声的に空の否定辞によって表される。③Phase理論に基づき、推量の「まい」が持つ時制の制約や主語の格の制約は「まい」が現れるC主要部の持つ素性がT主要部に継承された結果であると考えられる。

また、英語の否定の推量表現である can't との比較から、人間言語において一語の助動詞で表される否定推量のパターンとして、not possible を表す can't のようにC領域で否定の意味が解釈される場合と、possible not を表す「まい」のように否定がTPよりも低い位置にある NegP で解釈される場合の少なくとも2パターンが存在することを論じる。

[D-1]

感情・感覚・知覚を表す動詞のモード・テンス・アスペクト体系

呉 揚

工藤（1995）では、感情・感覚・知覚を表す動詞は、人称性・モード性と絡み合っ、スルーシテイルが外的運動動詞のように典型的アスペクト対立をなさないということが指摘されている。本発表では、この見解を踏まえつつ、小説の会話文の用例調査に基づき、これらの動詞の MTA 体系について詳細な検討を行った。その結果、確認・記述文でスル形式が未来の状態の発生を表せるか、表出文でスル形式が現在の状態を表せるか、確認・記述文でシタ形式が過去の状態の全一性を表せるか、表出文でシタ形式が現在の状態を表せるか、確認・記述文でシテイル／シテイタ形式が現在/過去の状態の継続および特性/体験的確認を表せるかといった観点によって、感情動詞は3類に、感覚動詞は4類に、知覚動詞は2類に分類されることが明らかになった。これらの動詞の MTA 体系は均質ではなく、また、感情・感覚・知覚といった語彙的な意味の違いを超えてタイプ化される。

[D-2]

「ものだ」：本質・傾向の用法から当為の用法への認識的アプローチ

陸田 利光

本研究では、形式名詞の「もの」に助動詞の「だ」が結びついた「ものだ」の用法のうち、本質・傾向の用法と当為の用法に焦点をあて、当為を表す場合は「当該事態に矛盾する～P(not proposition)が話者の認識に背景設定されている」という仮説を立て検証する。

この仮説を用いることにより、これまで当為の解釈で例外として扱われてきたものも捉えることが可能となる。例えば、浪人生に「浪人なんてものは、しておくもんだ」(高梨 2010) や、通院し病気が治癒した時の「医者に行ってみるものだ」など、当該事態が既実現で当為の解釈が保持されるものも、「浪人しないより」や「医者に行かないより」という～P が背景設定されているためと説明できる。

また、「母親はいつも子どものために犠牲になるものだ」(Fujii 2000)のような本質・傾向と当為の両義の解釈も、～Pが背景設定されている場合には当為の解釈になると説明がつくのである。

[D-3]

主体的意味の顕在化  
－複合動詞「一切る」を例に－

梅 麗莉

複合動詞「一切る」に関する研究は、後項の「一切る」を「変化達成」「終結」などの用法に分類したものがほとんどである。本発表では、複合動詞「一切る」を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分けた上で、主体的意味の顕在化という観点から後項動詞「一切る」の意味解釈を試みる。その結果、語彙的「一切る」は、客体的意味を前景化したものと主体的意味が際立っているものとに分けられ、それぞれ「切断」、「十分」を表わすことが示される。そして、統語的「一切る」においては、「十分」という主体的意味から派生的に生じる「極限」、「完遂」などが表わされるようになると主張する。つまり、複合動詞「一切る」における「切る」が表しているのは、「終結」「完遂」などではなく、むしろ前項動詞が示す事態が「十分」に進行しているという認知主体の主観的な認知プロセスであると考えられるのである。

[D-4]

日本語軽動詞構文における動名詞の削除と「動名詞+する」複合体の組成

内芝 慎也

動名詞 (Verbal Noun) が削除された日本語軽動詞構文 ((1)) を観察すると、次のような一般化が得られる。即ち、動名詞の内項が動名詞の投射の外側に現れている場合、動名詞が削除されると、その内項も同時に削除されなければならない、というものである。本発表では、この一般化が動名詞と軽動詞「する」から成る複合体の組成について意味するところを明らかにしたい。具体的には、この一般化から、動名詞と「する」の結合は語彙部門と統語部門では決して行われなないということが導かれることを論じる。そして、この結果により、「動名詞+する」複合体が音韻部門にて組成されるとする Fukui and Sakai (2003) の仮説が支持されるということを示す。

- (1) a. 太郎が日本語を研究し、次郎も (日本語を研究) した / 日本語を \* (研究) した。  
b. 太郎が日本語について講演し、次郎も (日本語について講演) した / 日本語について \* (講演) した。  
c. 旅客機が成田から離陸し、貨物機も (成田から離陸) した / 成田から \* (離陸) した。

[D-5]

大規模コーパスに基づく日本語二重目的語構文の基本語順に関する考察

笹野 遼平, 奥村 学

日本語二重目的語構文の基本語順に関しては、種々の理論研究に加え、心理実験や脳波計測に基づく多くの実証的研究が行われている。しかし、これらの手法は分析対象とした用例については高い信頼度で分析できるものの、他の用例に対しては改めてデータを収集する必要があり、仮説の網羅的な検証には不向きであると考えられる。そこで本研究では、基本語順は実テキスト中における語順の出現割合と強く相関するとの仮定に基づき、100億文を越える大規模コーパスを用いた日本語二重目的語構文の基本語順の考察を行う。本研究で得られた主な結論は次のとおりである。まず、動詞ごとに「がにを」語順と「がをに」語順の出現割合を調べた結果、基本語順としてこれらの両方があることが示唆された。また、二格の有生性と語順、および、各項と動詞の共起度合いと語順の関係について調査したところ、これらの間にはそれぞれ関係があることを示唆する結果が得られた。

[D-6]

日本手話の ABA 型構文と語順決定

原田 なをみ, 高山 智恵子

アメリカ手話においてはサンドイッチ構文と呼ばれる A-B-A 型の構文が見られ、動詞移動を伴うという分析が提案されている (Fisher and Janis 1992, 松岡 2001)。本研究では、実際に日本手話の母語者の発話データを調べ、ABA 型構文の存在の有無を追求した。その結果、日本手話の ABA 型構文は ASL とは大きく異なり、動詞の繰り上げは伴わないことが明らかになった。

日本手話の母語知識提供者から得たデータより、以下の ABA 型構文の特徴が明らかになった。① 特定の品詞・アスペクトに限定されない。② 必ずしも二つの A の形が一致している必要はない。以上のことから、日本手話の ABA 型構文は、下の動詞が統語構造上の上方に繰り上げられて生起するのではなく、複数の述語を主要部にもつ句が、統語計算の終了後、知覚符号部門とのインターフェイスにて階層構造の語順決定を行う際に生じると提案する。

[D-7]

短縮応答の非移動分析

木村 博子

本発表では、日本語の短縮応答の移動を仮定しない削除分析の提案を行う。短縮応答に対して現在主流となっている2種類の分析（分裂文分析(Saito (2004))および「のだ文」をもとにした移動分析(Nishigauchi and Fujii (2006))はいずれも、短縮応答が分裂文における焦点要素と並行的な振る舞いを示すことを予測する。本発表では、この予測に反し、短縮応答が焦点要素とは異なる振る舞いを示す新たな事例を提示する。さらに、短縮応答となる要素が移動操作の適用を受けていないことを示唆する事例を取り上げ、それらに基づいて短縮応答の移動を仮定しない削除分析を提案する。また本発表は、英語の短縮応答に対して den Dikken, Meinunger and Wilder (2000)および van Cranenbroeck and den Dikken (2006)が提案する削除メカニズムが、日本語の短縮応答にも適用可能なものであり、当該の削除メカニズムが普遍的な言語特性であるということを示す。

[E-1]

Proficiency effects in L2 processing of English number agreement  
across structurally complex material

Bronwyn G. WILSON and Edson T. MIYAMOTO

Some models of second language acquisition posit that elements such as English subject-verb number agreement cannot be processed in a native-like manner by second language learners, due to persistent deficits in grammatical knowledge or in the algorithm for applying that knowledge. We report a reading-time experiment in which high-proficiency Japanese-speaking learners of English processed agreement in a native-like manner (i.e., they slowed down when reading ungrammatical segments). This calls into question models that predict persistent deficits. We also report comparisons between proficiency measures (C-test, TOEFL-ITP) that indicate that the C-test is a useful measure of proficiency, as well as being practical for experimental use.

[E-2]

「構造の再帰性」に関する構文横断的獲得研究  
—子どもの日本語における所有句・場所句・関係節の再帰性

中戸 照恵, 照沼 阿貴子, 磯部 美和, 岡部 玲子, 中島 基樹, 猪熊 作巳, 稲田 俊一郎

人間言語における「再帰性 (recursion)」は近年の生成文法理論に基づく言語研究の中心的議題の一つである (Chomsky (2007, 2008 他))。Roeper (2011), Hollebrandse and Roeper (2014) らは, 子どもにおける所有句の繰り返しの理解調査などを通して, 特に「構造の再帰性」に着目した獲得研究を行っている。本研究は, 「構造の再帰性」が人間言語に普遍的なものであるかを検証する足がかりとして, 日本語を母語とする 4~6 歳児を対象に構文横断的獲得調査を行ったものである。調査の結果, ほとんどの子どもが, 所有句・場所句・関係節いずれの再帰構造も正しく理解することができた。この結果は, 「構造の再帰性」が人間言語に普遍的である可能性を示唆するものである。本結論を踏まえ, 名詞句内の修飾語句の再帰性に関する通言語的変異や, 構文間での若干の正答率の差について説明を試みる。

[E-3]

直示動詞における「話者領域」と視覚性：日中英語におけるビデオ実験による考察

松本 曜, 夏 海燕

本研究は, 日中英語において行われた通言語的発話実験の結果を基に, 直示動詞の用法における視覚の役割と, その言語差を考察するものである。一般に「来る」類動詞は〈話者の位置を着点とする〉ものとして分析されてきた (Fillmore 1971, 大江 1975 など)。これに対し Matsumoto, Akita & Takahashi (近刊) は「来る」類の意味を, 「話者の位置」ではなく「話者領域」(話者が自らの領域と見なす空間で空間的仕切りなどによって規定される) という概念から捕らえるべきだとしている。今回の実験ではさらに, 話者にとって見える領域であるかどうか, さらには, 話者が注目している領域であるかどうか, 「来る」類の用法において重要な役割を果たしていることを指摘する。また, そのような視覚の役割に関して日中英語で顕著な違いがあり, その一部は, 描き出される情景の中に話者がどこまで関与するのかという主観性に関する言語差 (池上 2003 など) の反映であると主張する。

[E-4]

日本語の統語的複合動詞の獲得—理解実験を通して

岡部 玲子, 磯部 美和

日本語は 2 つの動詞から成る複合動詞を持つ言語であり, (1)のような語彙的複合動詞と (2)のような統語的複合動詞に大きく分けられると分析されてきた (影山 1993)。

(1) 太郎が 木を 切り倒した。

(2) 太郎が 木を 切り忘れた。

語彙的複合動詞は, 2 つの動詞が直接併合した構造を持つとされ, 内項「木を」は  $V_1$  と  $V_2$  両方に共有される。一方, 統語的複合動詞は,  $V_2$  が  $V_1$  を主要部とする VP をその補部とする構造を持つと分析される。

言語獲得研究においては, 日本語を獲得中の幼児が 5 歳までには語彙的複合動詞を発話・理解できる一方, 統語的複合動詞の発話は非常に限定的であることが報告されており (木戸 2014 等), 表面上類似しているこの 2 つの複合動詞の意味的・構造的な違いを区別しているか否かについては解明されていない。本研究は 4~5 歳児に理解実験を実施し, (2) のような統語的複合動詞を正しく理解できることを明らかにした。

[5]

日本語における肯定対極表現と救済効果について

三好 暢博, 桑名 保智, 戸塚 将

同一節内に肯定対極表現と否定辞が共起すると, 当該の文の容認度が著しく低下するという事実は, 肯定対極表現を特徴づける観察である。これまで, このような観察に対する「例外」が指摘されているものの, 「例外」的環境の規則性に対しては十分な議論がなされていない。本発表の目的は, 上述の「例外」的環境を整理し, その含意を考察することにある。本発表では, 上述の「例外」的環境を, 「救済効果」(Szabolcsi (2004))の一例として位置付けることが可能であると論じる。その上で, 英語とは異なり, 当該の救済効果が, 両極性表現の生起環境と酷似することを示す。本発表の含意は以下 2 点である。①肯定対極表現と (弱) 否定対極表現とが表裏の関係にあるという見解は, 支持し難い。②目的語の反再構築効果に関する従来データの一部分は再検討を要する。

[E-6]

### 連体修飾と名詞の飽和化

三好 伸芳

名詞の「飽和化」という操作は、これまで非飽和名詞とその連体修飾要素との間においてのみ想定されてきたが、被修飾名詞が非飽和名詞ではない場合でも飽和化とほぼ同様の操作が行われることがある。ここでいう飽和化とは、被修飾名詞の語彙的な性質に起因するものではなく、連体修飾要素の意味的な性質によって臨時的に生じたものである。したがって本発表では、従来「飽和化」として捉えられてきた操作とは別に、もうひとつのタイプの「飽和化」が想定できることを主張する。

(i) 語彙的飽和化 (従来の「飽和化」)

語彙的に飽和化を要求する名詞 (非飽和名詞) のパラメータの値を埋める操作。

(ii) 複合的飽和化 (本研究が提示する「飽和化」)

修飾要素の意味的な性質によって、臨時的に読み込まれたパラメータの値を埋める操作。

「複合的飽和化」という概念により、例外的とされてきた「XはYがZだ」構文 (カキ料理構文) の現象を統一的に扱うことが可能となる。

[E-7]

### 左側要素が指示性を持つ複合語の効果と右側主要部の規則

納谷 亮平, 五十嵐 啓太, 西牧 和也

Namiki (2001)は、右側主要部の規則(Williams (1981))が日本語においても成り立つことを示している。しかし、日本語の複合語の中にはその例外に見えるものが観察される。その一つに「耳餃子」がある。これは、「餃子に似た耳」を意図しており、左側の要素が全体の意味を決定している主要部に見える。そうであれば、「耳餃子」は右側主要部の規則の例外という事になるが、本発表では、むしろ右側主要部の規則を効果的に利用して創り出された複合語であると主張する。すなわち、本来は左側に置かれるべき修飾要素である「餃子」を、あえて主要部位置である右側に置くことで、複合語の中心的要素として概念的に強く際立たせ、耳の餃子性を強調しているのである。「耳餃子」のような複合語は、その形成において右側主要部の規則を前提としているので、同規則の反例ではないと結論付けられる。

[F-1]

## 日本語の受動文

高井 岩生, 林下 淳一

Kuroda1979 は、動作主がニヨッテ句として現れるニヨッテ受身文には英語の受身文と同様、基になる動詞の外項を削除するという操作が絡んでいるが、動作主がニ格名詞句として現れるニ受身文には絡んでいないと主張している。本発表では、ニ受身文の中にも、主語が *affectee* とは解釈できないものがあること、このニ受身文はニヨッテ受身文同様、基になる動詞がガ格名詞句とヲ格名詞句を項とする場合にのみ可能であることを示す。そして、この場合の動作主ニ格名詞句はニヨッテ受身文の動作主ニヨッテ句と同様、付加詞であると論じ、ニ受身文の中にも基になる動詞の外項の削除を経て派生するものがあることを導く。これに対し、基になる動詞がガ格名詞句とヲ格名詞句以外を項としている場合などのニ受身文のニ格名詞句は項であると論じる。このニ受身文は *affectee* を外項として新たに付け加える操作を経て派生するのである。

[F-2]

## 内的使役状態変化動詞の構造について

井川 詩織

日本語動詞由来複合名詞は、第一要素が動詞の項である（例：米炊き）か付加詞である（例：窯炊き）かによって、連濁や句の包摂の可否について異なるふるまいを見せると言われてきた（Sugioka, 2002; 西山, 近刊, 等）。しかし、非対格動詞由来の複合語（例：品切れ）は、第一要素が項であっても、第一要素が付加詞である場合と同様にふるまう。本発表ではまず、複合に参加する非対格動詞が、外的な力を受けず項自身が状態変化を起こすという意味をもつ内的使役状態変化動詞に限られるという観察を提示する。さらに、動詞の語彙分解を統語的に行う立場をとり、これらの動詞が外的使役による状態変化他動詞（例：炊く）と異なる内部構造をもつため、外的使役状態変化他動詞を含めた他動詞の項複合語作成に用いられる名詞編入の操作が適用できず、付加詞複合語と同様のメカニズムでつくられるのだと主張する。

[F-3]

主要部外置理論に基づく日本語使役文の考察

田口 茂樹

本稿では、日本語使役文に代表される深層的二重対格構文を、主要部外置変形と、(4)の「格素性付値に関する一般化」に基づいて考察する。(1)のような表層的二重対格構文とは異なり、(2)のような深層的二重対格構文は、(3)の「表層的二重対格構文に関する一般化」によって排除できないことが知られている (Poser 2002, Hiraiwa 2010)。

(1) 表層的二重対格構文： ?太郎は花子を思いきり頭を叩いた。

(2) 深層的二重対格構文： \*太郎は花子を無理やり薬を飲ませた。

(3) 表層的二重対格構文に関する一般化：

Multiple identical occurrences of the structural accusative Case value cannot be morphophonologically realized within a single Spell-Out domain at Transfer. (Hiraiwa 2010)

以上を踏まえ、Saito (2012)等で提案されている主要部外置理論を採用し、日本語使役文の深層的二重対格構文が、(4)の一般化によって排除されると主張する。

(4) 格素性付値に関する一般化：

A functional element can value structural Case only within one maximal projection.

[F-4]

可能動詞の形態統語論に関する一考察：接辞 *e* の分布の観点から

高橋 英也, 江村 健介

本発表では、動詞に接辞 *e* が後接することで形成される「読める/yom-e-ru/」のような、いわゆる可能動詞について考察する。特に、分散形態論の基本的枠組みに基づいて、語根  $\sqrt{\text{Root}}$  が特定の機能範疇によって拡張されることで形成される重層的動詞句構造において、接辞 *e* がいかなる分布を示し得るのかという観点から、可能動詞に対して新たな形態統語的分析を提示する。より具体的には、動詞句の統語構造として広く想定されてきた、二層分裂構造の上位を占める機能範疇 *F* に対する語彙挿入によって、接辞 *e* が具現することを提案する。さらに、接辞 *e* の 'small' *v* に対する「再分析」を仮定することによって、「ら抜き言葉」や「レ足す言葉」といった可能動詞にかかわる方言間の多様性についても、統一的視座に立った理解が得られることを示す。最後に、動詞の自他交替における、いわゆる「両極の *e*」について、通時的過程における可能動詞の出現という観点から再考察する。

[F-5]

日本語の口語におけるテンス・アスペクトの省略現象

今西 祐介, ヘファナン ケビン, 本田 盛

本発表では、関西弁話し言葉コーパス（ヘファナン 2012）を用いて、テンス・アスペクト（TA）を欠いた非定形述語の文末における分布を考察する。定量的分析の結果から、文末に現れるテ形による非定形述語は状態動詞のようなイベント性の低い述語と多く共起する。Takano (2004)のテ形に関する提案と Abney (1987)や Alexiadou (2001)等の名詞句・動名詞の提案を発展させ、テ形を **defective TA** を含む動名詞であることを提案する。この分析から **defective TA** のみで成立する文はイベント性が低い場合が多いことを明らかにする。さらに **defective TA** のみを含む文の発話割合の世代間差が存在することを示す。最後に、イベント性が低い述語文において TA が現れないパターンがマヤ諸語にも見受けられることを示し、通言語的に普遍性が高いことを指摘する (Henderson to appear; Imanishi 2014)。

[F-6]

琉球語与論方言における受動動詞述語文の受影性

當山 奈那

北琉球語群に属する与論方言では、受動の形態素-aari は動詞の語根に後接する。この時、動作主体は与格 nan で表示され、動作主体が主格で表示されている能動文と対照的になる (cinoo tara=nan kj-aari-ta-n. 「綱は太郎に切られた。」。この能動/受動における通常の格表示に加えて、(waacjoo tara=ga cina kj-aari-ti, kuma-ta-n. 「私たちは太郎に綱を切られて、困った。」) のような例が存在する。受動形態素-aari があらわれているが、動作主体 (太郎) が主格で表示されるこの構文は、主語にさしだされた参与者に対する受影性の意味を伴いながら、第二中止形 (テ形) の副詞節をマークする構文である。この前提をもとに、本発表では、当該構文のもつ受影性の特徴を明らかにする。当該構文が受動文とは異なり、他動詞だけでなく、自動詞や存在動詞、一部の状態動詞からも作られることから、間接受動文がもつ受影性を保持しているが、受動文ではないことを示す。また、当該構文は、「はた迷惑の受身」(三上 1953) にも、「第三者の受身」(鈴木 1972) にも還元できないことを述べる。

[F-7]

奄美喜界島上嘉鉄方言の形容詞と比較表現

白田 理人

奄美喜界島上嘉鉄方言では、形容語根に接辞-*sa(r)*または-*ku* が後接し、随意的に状態動詞 *ar*-を伴って述語を成す。本発表では、-*sa(r)*形／-*ku* 形の形態統語的特徴・意味的特徴と両者の差異として、以下を論じる。

- -*sa(r)*形の (-*ku*に見られない) 特徴
  - 接辞-*sa* と状態動詞 *ar*-が融合した形式-*sar*-があり、動詞に(概ね)準じた活用を示す。
  - 特定の構文(強調構文と証拠性構文)で名詞句的な振る舞いを示す。
  - 文脈から比較基準が与えられている場合もそうでない場合も区別なく用いる。
- -*ku* 形 (-*sa(r)*に見られない) 特徴
  - 形容語根に加え、動詞非過去連体形がホストになりうる。
  - コピュラが後続するなど、名詞述語の主要部に準じた振る舞いを示す。

文脈から比較基準が与えられることを示し、形容詞述語であれば程度、動詞述語であれば程度あるいは数量、頻度のスケールにおける比較を表す。

[G-1]

ラワン語ダル方言の疑問小辞

大西 秀幸

ラワン語ダル方言では任意の文が疑問文であることを示すために、文末に小辞である *má* か *lé* のいずれかが現れる。ダル方言に関する文法概説である **Barnard (1934)** では疑問語の現れる疑問文には *lé* が、現れない疑問文(諾否疑問文)には *má* が現れるという説明がある。しかし筆者の収集した資料からは、疑問語の現れる疑問文に *lé* が用いられる例や、ごく少数ではあるが疑問語が現れる疑問文であっても *má* が現れる例も散見された。この矛盾を疑問の内容から分析した結果、*má* は疑問の焦点が命題全体にかかっているときに、*lé* は焦点が命題の一部に及ぶときに現れるということが分かった。すなわち、疑問小辞の分布は疑問語の生起に左右されるのではなく、疑問の焦点が命題全体に及ぶか否かに左右されることを主張する。

[G-2]

ワ語における多音節単純語の分析

山田 敦士

ワ語（中国雲南省，モン・クメール語族）は語構成において単音節性を強く示すが、共時的に分析不可能な多音節語も少なくない。本発表では、次の4点から多音節単純語の通時的解釈を試みる。

1) 多音節単純語の分類：a) 後部が自由形態素と同形式のもの（化石化した接辞法、重複法の名残）；b) 前部が自由形態素と同形式のもの；c) 前後部とも由来不明なもの

2) 類似並列型複合語との比較対照

類似並列型複合語は後部要素が従属的であり、拘束形態が現れることも多い。この拘束形態の音韻・形態特徴は多音節単純語（b）（c）の特徴に通じる。

3) 前部音節の弱化

ワ語には前部音節の弱化という通時的傾向が認められる。前部要素が同定されない（a）（c）はこの弱化の過程にある。

4) 多音節単純語の通時的方向性

多音節単純語（b）（c）について、次の通時的方向性が推定される。

類似並列型複合語 > 後部要素の無意味化 > 多音節単純語化 > 前部音節の弱化

[G-3]

サハ語（ヤクート語）の受身接辞・再帰接辞・逆使役接辞

江畑 冬生

従来のサハ語の研究では、再帰接辞に2種の異形態素 *-n* と *-in* があり、受身接辞にも2種の異形態素 *-n* と *-ilin* があるとされてきた。本発表では、これらを3つの形態素（再帰接辞 *-(i)n*、逆使役接辞 *-(i)n*、受身接辞 *-ilin*）として分析すべきであると主張する。この主張を支持する点として、接辞の意味と、その形態音韻的・形態的・統語的な振る舞いとが対応していることを示す。

再帰接辞と逆使役接辞は同音形式であるが、3つの点で形態音韻的な振る舞いが異なる。加えて再帰接辞のみが他のボイス接辞に後続可能であり、再帰動詞には対格目的語を取れるという特徴がある。

従来は受身接辞の異形態とされてきた *-n* は、逆使役接辞の異形態として分析すべきである。その根拠として、受身接辞 *-ilin* のみか他動詞からの非人称受動文において用いられることを指摘する。

[G-4]

キルギス語の複雑動詞述語を受動化する三つの方法

大崎 紀子

キルギス語では、他のチュルク語と同様に、連続した複数の動詞の組み合わせによってアスペクトや動作様態などを表す複雑動詞述語が発達している。例えば、*oku-p čik-* (読む-継続副動詞 出る-) 「読み終える」などである。本発表では、二個の動詞からなる述語を受動化する場合、キルギス語では、(1)先行動詞と後続動詞の両方を受動形にする、(2)後続動詞だけを受動形にする、(3)先行動詞だけを受動形にするという三つの方法が観察されることを指摘する。しかし、どの複雑動詞述語にも三通りの受動化が許容されるわけではなく、二つあるいは一つの受動化方法しか許容しないものもある。意味的かつ統語的に緊密度の高い複雑述語では(1)(2)のみが成立し(3)が成立しにくいこと、また、後続動詞が「持続状態」を表すアスペクト補助動詞である場合にはもっぱら(3)が用いられることを指摘し、考察を行う。

[G-5]

モンゴル語の *preverb* による破壊動詞化について

山田 洋平

モンゴル語の *preverb* と呼ばれる語群は、動詞の前に置かれ「動作の勢いなどの意味を強める」機能を持っている。本論では、こうした「強める」機能が状態変化を伴う動作の結果性から生じるものであると見る。その上で *preverb* の機能の本質は破壊動詞化であると論じる。

本研究ではまず *preverb* を語根として派生する他動詞 (*xagal* 「壊す」、*delbel* 「爆破する」など: 破壊動詞) が Fillmore の提案する *breaking verb* にあたるものであると見る。他方、*preverb* と共起しうる動詞 (*buud* 「撃つ」、*coxi* 「殴る」など) が *breaking verb* に対する *hitting verb* にあたると考える。「～したが...なかった」型の構文に当てはめて容認度を調べると、*hitting verb* に当たる動詞は容認されるが、これに *preverb* が付されると容認されなくなる。さらに直接目的語項の格の現われを見ると、*hitting verb* にあたる動詞では後置詞的な方向格 RUU も使用可能であるが、*preverb* が付されると RUU の使用は許容されない。つまり *preverb* が付されることで *hitting verb* は *breaking verb* に変わる、破壊動詞化が起こっていると考えられる。

[G-6]

モンゴル語の第2音節以降の母音体系について  
—借用語のデータをもとに—

植田 尚樹

モンゴル語の第2音節以降の母音体系に関して、先行研究では「長短の対立はなく、音素的母音と（音素的でない）挿入母音の区別がある。借用語では、原語でストレスを持つ母音は音素的母音となるのに対し、ストレスのない母音は音素的には存在せず、規則により弱化母音が挿入される」と分析されている。しかし、第2音節以降のストレスを持たない母音が音価を保ったまま借用され、接尾辞の母音調和を引き起こす例がある。これは、第2音節以降の母音が音韻的に存在することを裏付けている。

この事実に対し、原語のストレスの有無にかかわらず、借用語の第2音節以降の母音を音素的とみなす分析もあり得るが、原語のストレスの有無による母音長およびピッチパターンの差異を無視することになり、望ましくない。2音節以降にも短母音と長母音の対立を認める分析を取れば、音声的事実に合致する点、第2音節以降の母音体系が第1音節と同じになる点で優れている。

[G-7]

満洲語文語のふたつの具格接辞

山崎 雅人

満洲語文語の具格接辞-i と de の差異を、Gorelova(2002: 185)は時制や人称の違いにより論じているが、本研究では『満文金瓶梅』の例文に基づき、前者を無標、後者を有標と見なしてその機能的な特徴を論証する。abka na gemu **menggun -i** miyamiha（天地皆銀で化粧した）: ere **menggun de** hobo udafi（この銀子で棺桶を買い）のように、物質としての銀は-iで、貨幣としての機能には de を用いる。また、uju de dzung sika **-i araha** amba mahala（頭に棕の線維で作った大きな帽子）: ilan hūntahan okto **de araha** u-hiyang nure（三杯の薬で作った五香酒）のように、原材料が分かる物で作る場合は-iで、薬など素材を加工し原材料が分からない製品を作る場合は de を付ける。

[H-1]

A Syntactic Classification of the Prenominal Clauses in Japanese

Tatsuhiko MATSUDA

Although it has been widely recognized that Japanese has several types of prenominal clauses since the early days of generative grammatical study of Japanese, only a few syntacticians deal with the problem how these clauses should be syntactically classified; that is, only a few syntacticians address the question whether such prenominal clauses have one and the same structure or each clause has a different structure. In this study, I propose that structures of the prenominal clauses in Japanese should be syntactically classified into two types, adjuncts and complements. In so doing, I show that the proposed classification is preferred to Comrie's 2010 and Whitman's 2012 classification.

[H-2]

Focused Heads in *That*-Relatives

Hisashi MORITA and Takashi IKEDA

This talk argues for a raising analysis of head nouns for *that*-relatives by presenting two new facts. First, the head noun is base-generated inside a relative clause and raised to the surface position through FocP in Rizzi's (1997) split-CP. Secondly, there are two types of head nouns that employ *that*-relatives: One type of head nouns are inherently focused expressions such as *the only N*, *the superlative N*, and *the very N*, and always require *that*-relatives, whereas the other type include quantifiers such as *no N* and *every N*, which optionally allow *wh*-relatives. Considering interpretational differences between the two types, it is claimed that quantifying determiners such as *no* and *every* merge with the head nouns only after head raising.

[H-3]

Reconsidering the Constituency of Floating Numeral Quantifiers in Japanese

Hideaki YAMASHITA

Whether or not floating numeral quantifiers (FNQ) in Japanese forms a constituent with its host NP has been one of the topics discussed for more than decades. This work offers two sets of novel evidence for the single constituent approach. [1] Ellipsis: While the FNQ alone cannot be subject to ellipsis, it can be elided iff its host NP (which by itself can undergo ellipsis) is also elided. [2] Scrambling: While multiple long-distance scrambling (LDS) involving two or more constituents cannot end up in different landing sites and they need to be in the same landing site, the FNQ and its host NP are immune to such ban on “split” multiple LDS (Sakai 1994, Sohn 1994, Yamashita 2015).

[H-4]

The semantic inertness of medial right-node raising in Japanese

Shuichi YATABE

In the first half of the present paper, the results of questionnaire studies will be presented which indicate that medial RNR (i.e. a type of right-node raising that places all or part of the right-node-raised material at a location other than the right edge of the final conjunct) in Japanese cannot affect the truth-conditional interpretation of noun phrases, unlike medial RNR in English, which has been shown not to be semantically inert by Kubota (2014) and Warstadt (2015). In the second half of the paper, a new analysis of medial RNR will be proposed which incorporates the hypothesis that medial RNR is semantically inert in those languages where conjuncts are scope islands.

[H-5]

言語理論研究における「ツール」としての範疇文法

窪田 悠介

理論言語学と計算言語学の 90 年代以降の乖離以来、言語理論研究において形式的アプローチを採用することの重要性がないがしろにされるようになって久しい（戸次 2010）。本発表では、ハイブリッド範疇文法（Kubota 2010, Kubota 2015, Kubota & Levine 2015, to appear）と呼ばれる範疇文法の新しい理論を提案し、この状況を打開するための端緒を開くことを目指す。具体的には、範疇文法を用いることで、現在の理論言語学研究において主流である移動に基づく枠組みを用いて表現された分析を、ほぼそのまま計算機で解析（パース）できる文法に書き直すことができることを示す。理論言語学研究者にとっては、これは、理論検証のための新しい道具立て（計算機での明示的な実装）が労せずして手に入ることを意味する。

[H-6]

External Pair Merge に関する考察

大塚 知昇

Chomsky (2014)は Label の観点から Phase 理論をさらに発展させた。特筆すべき点として、(i) External/Internal Merge の自由適用、(ii) Phase 主要部性の譲渡に伴う転送領域の変化があげられる。

この最新の枠組みのもと、Epstein, Kitahara, and Seely (EKS) (2015)は、Bridge Verb の例に対し、R と  $v^*$ を直接 Pair Merge する「External Pair Merge」による分析を提案した。また彼らはこの分析を拡張し、同様の操作が受動文/非対格動詞構文の弱 Phase  $vP$  の派生でも起こると主張した。

この提案は理論的に優れたものであるが、スウェーデン語等で受動文の過去分詞上に屈折が現れる例が反例となる。本発表ではこの反例に対し、EKS (2012)で議論された格付与の枠組みを援用し、非能格動詞の例が External Pair Merge により派生し、受動文/非対格動詞構文は基本的には通常の派生により生じると主張する。さらに(i)の Merge の自由適用に基づき、過去分詞上の屈折の出現の選択性と、屈折と名詞の移動の関係性にまで議論を拡張する。

[H-7]

日本語の数量表現における名詞句削除について

中西 亮太

本発表では、日本語の数詞および類別詞（以下、数量表現と呼ぶ）を伴う名詞句削除現象について、統語論の観点からその可否性およびメカニズムへの説明を行う。従来より、数量表現を伴う名詞句削除は認可されないという立場が取られている一方で（Saito and Murasugi 1990, Saito, Lin, and Murasugi 2008）、認可され得ると論じる研究もある（Watanabe 2010, Takahashi 2011）。本発表ではまず、後者の立場を取りつつも、先行研究における後者の立場を支持する根拠について考察し、それらが妥当ではないと論じた上で、真に名詞句削除を伴うとする新たな言語事実を呈示する。この言語事実は上述の数量表現を伴う名詞句削除は認可されないという立場からは説明が不可能となるため、新たな統語構造を提案し、それに基づいた分析を行う。また、この分析について更に詳細な提案を行い、別の言語事実とともに新たな提案の妥当性を示す。

■ポスター発表（11月29日（日） 11:30–12:50）

[P-1]

意味論的観点からの中国語の遊離数量詞

姜 銀実

本研究は「Monotonicity Constraint」(Nakanishi 2003)が中国語の遊離数量詞文の可否にも有効であるかを考察した結果、日本語と平行的な振る舞いが中国語でも観察されることを指摘する。Monotonicity であるかどうかは、その事象(event)が全体の適切な部分集合を構成しているかどうか依存するとされている。中国語の遊離数量詞は制約が多く、ホスト名詞句と分離できる数量詞が基本的に動詞の補語位置にしか生起しないという強い制限がある(山口 2005)。「Wuding shang xue dui le 3 dun (雪が屋根の上に3トン積もった)」は適格文であるが、「\*Zuotian xue yata le nage fangzi 3 dun (\*雪が昨日3トンその家を押つぶした)」は非文になる。「積もる」は、サブイベントがいくつかあり、大きいイベントを形成することで、部分全体の関係を満たしているが、「押つぶす」は、サブイベントを形成しないため非文になる。したがって、日本語ですでに指摘された制約が中国語においても観察されるのである。

[P-2]

かき混ぜ文の処理における名詞句の長さの影響：実験研究

岩渕 俊樹, 幕内 充, 水落 (遠藤) 智美

本研究では心理言語学的手法を用いて、目的語が長いかき混ぜ文は短い場合に比べて処理負荷が軽減されるという仮説を検証した。SOVあるいはOSVの語順を持つ他動詞文を刺激とし、SまたはOに修飾句を付加することで、主語が長い文(例。真剣な顔付きのアキラがアイコを叱った)または目的語が長い文(例。真剣な顔付きのアイコをアキラがおちよくった)を作成した。これらの刺激を用いて容認度評定実験を行った結果、かき混ぜ文であっても目的語が長い条件は、主語が長い条件よりも文法的な容認度がより高く評定されることが明らかとなった。また同様の刺激を用いて自己ペース読み実験を行ったところ、目的語が長いかき混ぜ文では主語が長いかき混ぜ文よりも読み時間が早まることが示された。これらの結果は、目的語が長いかき混ぜ文の処理負荷は軽減されるという冒頭の仮説を支持するものといえる。

■ワークショップ（11月29日（日） 10:00-12:00）

[W-1]

古代文字文献を資料とした死言語の文法研究  
—中エジプト語・契丹語・シュメール語・西夏語の事例から—

企画・司会：荒川 慎太郎

「文献言語学」の中でも、話者の絶えた「死言語」の研究は独自の位置を占める。死言語を専門とする研究者が、どのようなアプローチで言語研究を行っているか、特に文法研究に関して論じ合う。当該言語を記した古代文字文献を精読すること、同系統の言語の文法現象を丹念に検討することなどから、その言語の実像が明らかにされる。これらの実例を示すため、中エジプト語・契丹語・シュメール語・西夏語など、系統・性格の異なる言語・資料を対象とする研究者が集い、各人の分析法・資料の制約とその対処などを論じ、言語研究者にもなじみの薄い領域の課題と展望を紹介する。個別の死言語の研究は、従来、「同系統」「同地域」などの共通項をもつ学会などで報告されるのが常であった。あえて、言語のタイプ・系統、地域、資料などに共通点のない研究者が集まることで、それぞれの課題や限界を浮き彫りにする、これまでにないユニークなワークショップとなる。

[W-1-1]

中エジプト語における文法研究の試み  
—動詞述語文を事例として—

永井 正勝

エジプト語はアフロ=アジア諸語に属するエジプト土着の言語であり、資料の年代は約4500年間（紀元前3100年頃～紀元後14世紀頃）に及ぶ。その中で、聖刻文字あるいは神官文字で書かれた中エジプト語（紀元前2000～1300年頃）と呼ばれる発展段階の資料は残存数が多いばかりか、エジプト文明の解明に係わる資料が多いために研究の蓄積も豊富である。しかしながら、中エジプト語の文法記述は必ずしも進展しているわけではなく、特に動詞の形態論と文法範疇の解明については課題が多い。その最大の理由は、子音表記を原則とする表記法が採用されていたために、言語形式が見え難くなっているからである。そこで本発表では、中エジプト語の表記法を紹介したうえで、文献資料における「形式」について考察する。また、19世紀末から現在までの研究者達が何を拠り所として動詞述語文の解明を行ってきたのかを概観したうえで、動詞述語文に関する近年の解釈例を紹介する。

[W-1-2]

契丹語文法研究の方法と課題  
— 当為・可能表現の解説を例に —

大竹 昌巳

契丹語は 10～12 世紀に中国北方で使用された 2 種類の契丹文字文献によって知られる、モンゴル諸語と系統関係を有する言語である。報告では、契丹小字文献を用いた契丹語の解説状況と文法研究の一端について紹介する。契丹小字の出土文献は今もなお増え続けているが、全体量は決して多くなく、そのほぼすべてが墓誌銘である。有力な対訳資料はほとんどなく、文意を正確に理解できる箇所は限られる。そのような状況における文法解明の一つの事例として当為・可能表現を取り上げる。銘文中には漢語古典籍の翻訳引用が見られるが、そこから漢語「可」に対応する意味をもつとみられる形態素を抽出することができる。この形態素は使役・受動を表す形態素と同形であるが、この形態素が当為・可能の意味をもつことは、中期モンゴル語文献における同様の表現の存在から論証される。上の事例を通して、現段階における契丹語の文法研究の方法と課題について述べたい。

[W-1-3]

シュメール語文法研究の方法と課題  
— 動詞接頭辞の解釈を例に —

森 若葉

シュメール語は、メソポタミア地域において紀元前 4000 年紀末から紀元後 2 世紀までの資料が残る楔形文字言語である。名詞や動詞は表語文字であらわされ、文法関係を表す接辞は音節文字で記される。資料は 10 万点以上が知られており、これからも多くの資料の発掘が期待されている言語である。系統不明の言語であるシュメール語は、前 3000 年紀にセム系のアッカド語と共存関係にあった。死語となったのちも、書きつづけられたシュメール語の音韻、文法組織を現在知ることができるのは、アッカド語で記されたシュメール語字書や文法書の存在によるところが大きい。シュメール語の文法研究は古代のアッカド語話者の理解・研究のうえになりたっている。このような文献言語における文法研究の方法とその問題点について、近年の研究成果を交えながら、複雑なスロット構造をもつ動詞組織の解釈を例に紹介する。

[W-1-4]

西夏語の文法研究  
—各種資料からみた文法語を例に—

荒川 慎太郎

西夏語は 11～13 世紀、中国西北部に存在した西夏国の言語であり、言語系統はチベット・ビルマ語派に属する。現在では死言語と化したのが、西夏文字（表意・表音節文字）で記された資料が残る。現存する資料の大半は、漢語・チベット語から訳された仏教文献である。西夏語の文法研究に関して報告する。翻訳文献は文の内容そのものの理解の手掛かりにはなるが、どこまでが西夏語本来の表現なのか注意する必要がある。また翻訳といっても、西夏文には漢語・チベット語に対応物の無い文法要素が出現する。その意味、文法範疇の確定には困難を伴う。各種文献の事例を収集し、文法語の出現環境や出現頻度を精査するほか、チベット・ビルマ系少数民族語の文法現象も手掛かりにする。先行研究から動詞接頭辞の事例を紹介する。また報告者が近年課題とする「遠称の指示代名詞」、「双数標識として機能する動詞接尾辞」などの研究法と現段階の成果を述べる。

[W-2]

使役と事象構造: 重なる使役, 繰り返す使役

企画・司会: 長屋 尚典, コメンテーター: 西村 義樹, 古賀 裕章

使役は言語類型論の分野において最も研究されている現象の一つであり, いかなる言語理論においてもその分析は重要な位置を占める。一方で, 言語における二重性・二面性 (重複, 多義性など) は「言語形式によって意味を表すとはどういうことか?」という根源的な問題に答える手がかりとなる。そこで本ワークショップでは使役とその事象構造に見られる形式と意味の「二重性」あるいは「二面性」に注目し, 使役の通言語的研究に新しい光を当てる。具体的には, 使役接辞の重複や使役構文の形式的二重性, 意味的二面性の問題に取り組む。これらの諸問題の解決を通して, 本ワークショップは, 単に使役構文のみならず, 重複, 多義性, 文法化, 事象構造について新しい分析を提示し, 言語類型論の観点から一般言語学に貢献する。方法論的にもエリシテーションだけでなくコーパスを使用した分析も行い, 従来にはない観点を提示する。

[W-2-1]

コーパス調査から見るトルコ語の形式的二重使役

青山 和輝

トルコ語では, 動詞に使役形態素 **-DIr/-t** を二度付加して形式的二重使役をつくることができるが, 従来, 「使役の強調」程度の曖昧な意味記述しか為されてこなかった。そこで本発表では, ニュースや議事録から用例を収集したタグ付きサンプルコーパスである **TS Corpus** (<http://tscorpus.com/>) を用いて, 意味の観点から頻度分析を行い, 「使役の強調」が「強制」「説得」といった, 使役者が積極的に事態の成立に関与するような「典型的な使役」を指していることを実証する。

さらに頻度分析の結果を分析することにより, ①形式的二重使役が通常の使役に比べて, 動詞の慣用的な意味やイディオムを排除するように偏って分布していること, また②「所有受身」読みが出やすい動詞については, 通常の使役が「所有受身」読みを, 形式的二重使役が「典型的な使役」の読みを担うように分化が進んでいること, という今までにない視点を提示する。

[W-2-2]

バスク語の *eman* 「与える」と認識・知覚・飲食動詞による使役文

石塚 政行

バスク語の動詞 *eman* 「与える」は、動名詞補文によって結果事象を表す一種の使役構文 (*eman* 構文) を形成する。*eman* 構文の補文の述語となる動詞は、認識・知覚・飲食の3つの意味クラスに限られる。本発表では、認識・知覚動詞の *eman* 構文では使役が補文にも標示されることがあるのに対して飲食動詞の場合はそのような二重性が見られないことに着目し、この違いがこれらの動詞の表す事象の違いに基づくことを主張する。

認識や知覚は有情物の本質的な性向であって、意図や欲求とは関係なくものや情報を受け取ることで自動的に成立してしまう。一方で、飲食は飲食物を受け取っただけでは実現せず、それを飲食しようとする意図が必要である。このため、認識・知覚動詞の *eman* 構文が単なる使役を表すのに対し、飲食動詞の場合は許容使役を表す。補文動詞の使役形は許容使役を表すことができないので、飲食動詞の *eman* 構文では標示できないが、認識・知覚動詞の場合には可能になる。

[W-2-3]

ヒンディー・ウルドゥー語の *deenaa* 「与える」を用いた使役構文と多義性

田中 太一

ヒンディー・ウルドゥー語の、具体物・抽象物の所有権の移動を表す動詞 *deenaa* 「与える」は、斜格不定詞を取り、ある種の使役構文を形成する。この構文にはさらに、許可使役・放任使役に二分できる。この許可使役と放任使役は、同じ *deenaa* を用いて表現されるものの、形式と意味の点で大きく異なっている。本発表では、「力動性」の観点から、前者を“onset letting”, 後者を“extended letting”として分析し、両構文の共通性と差異を“letting”における拮抗子の振る舞いの違いによる多義であると示す。

許可使役では、主動子が有生物の場合には許可が、無生物の場合には傾向発現のための力が拮抗子から与えられる。このことは、格配置にも反映され、許可使役における被使役者は、受け手の典型的な格標識である=*koo* (与格) でマークされ、放任使役の被使役者は= $\phi$  (主格) でマークされる。

[W-2-4]

使役の観点から見る英語の動詞 *laugh* の二面性と自動詞の事象構造

野中 大輔

英語の動詞 *laugh* が *at* 句を伴う場合、次のように二通りの用法が見られる。

(1) Paul laughed at Mary. (*at*: directed toward)

(2) Paul laughed at the story. (*at*: in reaction to)

(1)は Paul があざ笑った結果として Mary がばかにされた気持ちになるといった状況を想定すれば、使役の複合的な事象構造が見出せ、使役事象に *laugh* が関わっていると言える。それに対して、(2)は話を聞いた結果 Paul が笑ったということなので、被使役事象に *laugh* が関わっていると考えられる。このように、使役の観点を導入することで二つの用法の関係性を捉えることができる。

*laugh* に(1)と(2)の用法が存在することは、非能格動詞・非対格動詞という二種類の自動詞の関係を考える上で興味深い事実である。一般的に *laugh* は非能格動詞として扱われている。しかし、*at* 句の解釈から言うと(2)の *laugh* は *blush*, *tremble* などの非対格動詞と考えられるものに近い面をもつ。*laugh* のもつ二面性を観察することは、自動詞の事象構造の研究に新たな光を当てるものだと言える。

[W-3]

日本語方言のケースマーキングのとりたて性と分裂自動詞性

企画・司会：竹内 史郎，コメンテータ：風間 伸次郎

近年の日本諸語における主語標示の研究では分裂自動詞性が見出されている。また、ケースマーキングが情報構造に依存することがあるとの議論も生じている。本ワークショップでは、主語標示の分裂自動詞性と情報構造による格標示の動機づけが密接な関係にあるとの見通しの下、情報構造と統語論のインターフェースについていくつかのアプローチなしいし手法を示す。それぞれの発表者が考察において共有するのは次の諸点である。

1. 無助詞現象（主題・主語・目的語）を考慮する
2. 焦点のあり方（文焦点，項焦点，述語焦点等）と有形格標示の出現の関心に留意する
3. 類型論的な観点をふまえ主語標示の分布に着目する

琉球，九州，本州等の方言にとりたて性と分裂自動詞性（活格性）が認められることを確認し，その上で，それぞれの方言におけるとりたて性と分裂自動詞性（活格性）について比較対照を行い，それらの共通性と多様性を吟味しながら議論を進めていく。

[W-3-1]

焦点化と格標示

下地 理則

本発表では，琉球諸方言（奄美・宮古・与那国）の記述データを使って，主語の格標示と焦点標示の関連を考察する。一般に琉球諸方言は，九州諸方言と同様に，主節においてガ系とノ系の格標識の交替がみられ，その交替要因には共通点も多いが，琉球諸方言の場合，格標識とは別に焦点標識（ドゥ）がある。これにより，格標示と焦点標示の相互作用（例えば九州諸方言で見られるようなガ系の焦点標示機能：坂井発表）はみられないと予測され，実際に先行研究の多くではこの相互作用の議論がなされていない。

本発表では，琉球諸方言の格標示と焦点標示が互いに独立しているといえる方言は稀であり，ほとんどの方言で，格標示と焦点標示が程度の差はあれ相互に関連していることを示す。格標示と焦点標示が関連する度合は，概して焦点標識の使われやすさ（例えば対比だけで使われるか，文焦点でも使えるか，など）とかかわっている。

[W-3-2]

沖縄久高島方言の主語・目的語の格標示

新永 悠人

沖縄県の久高島方言の主語の格標示には、有形の形式として **ga** と **nu** の 2 種類が存在する（目的語の格標示には有形の形式は存在しない）。**ga** はあらゆる種類の名詞に後接するのに対し、**nu** は人称代名詞・指示詞・呼称詞（呼びかけに使える名詞）の 3 種には後接できない。その一方で、主語の格標示に関して約 66 分の自然談話データ（戦争体験のモノローグ）を分析すると、**ga** も **nu** も現れない場合（つまり、名詞句にいかなる助詞も後接しない、いわゆるゼロ標示の場合）が多く存在する。結論から述べると、このような主語のゼロ標示は主題（topic）を表している。本発表では、主に自然談話データを利用して、久高島方言の主語における **ga**、**nu**、ゼロ標示の使い分けを詳細に論じる。

[W-3-3]

九州における分裂自動詞性

坂井 美日

本発表では、無助詞現象が関与しない分裂自動詞性のケーススタディとして、熊本方言・甕島方言などのデータを挙げ、以下のことを述べる。

熊本方言や甕島方言等、九州の一部の方言では、①主語表示に「ガ」と「ノ」の二形式がある。②「ガ」か「ノ」による主語表示はほぼ義務的であり、無助詞がデフォルトとは考えにくい。③主節でかつ主語に焦点が当たらない環境では、主語の他動性に応じて「ガ」と「ノ」が使い分けられる。他動性が高い場合には「ガ」が選択され「ノ」が退けられる。低い場合には「ノ」が用いられる。この使い分けにより、分裂自動詞性が観察される。④主語名詞句に焦点が当たる場合、他動性に関わらず「ガ」が選択される。

上記の観察から、本発表に扱う九州方言の「ガ」は、他動性、或いは、情報構造（焦点）の有標性を表すと考えられる。

[W-3-4]

関西方言の格標示のとりたて性と分裂自動詞性

竹内 史郎, 松丸 真大

関西方言における無助詞現象はよく知られるところであるが、この背景には次のことがあると思われる。関西方言では他動詞文の主語と目的語の区別に、格標示以外の手段、すなわち語順や有生性効果ははたらくことがあり、また、文脈情報が両者の区別に関与することもある。語順や有生性効果、文脈情報は格標示と等価であるので、これらが決め手となれば格標示という手段が不要となる。こうしたことに加え、本発表では、関西方言の無助詞現象の背景には有形の格標示が情報構造に関するマーキングを担っているということがあると考えられる。その上で、ガの標示が義務的であったり任意であったり不可であったりすることが情報構造を考慮した文のタイプにより予測可能であることを示す。さらには、この予測のうちに分裂自動詞性が認められることを明らかにする。さいごに関西方言のよような言語において一般に行われる格組織といった整理が有効かどうかを検証する。